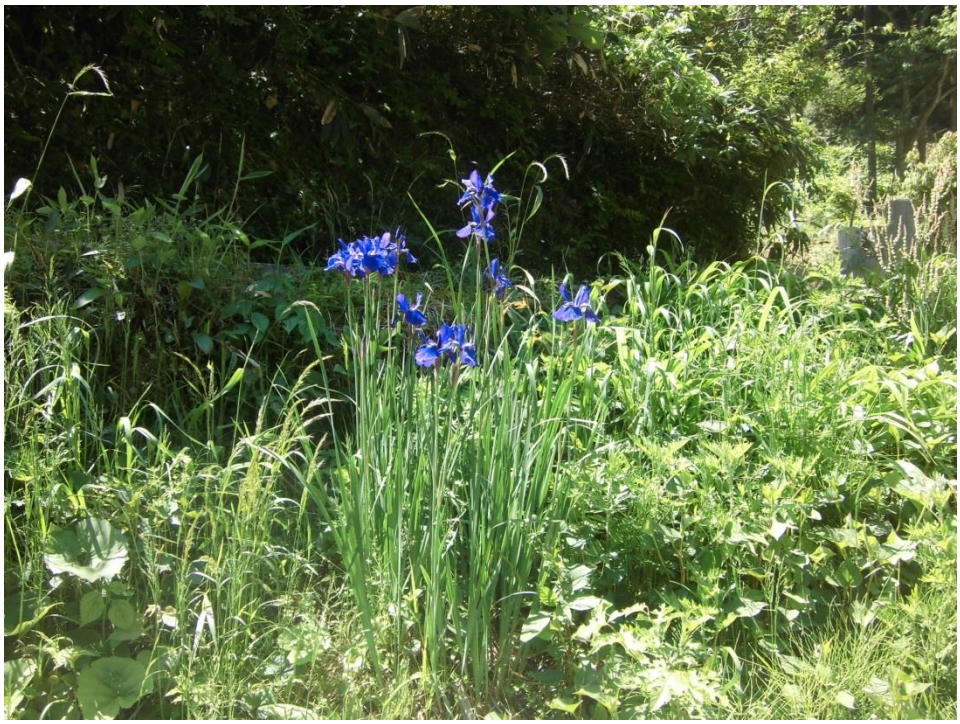

理事長コラム

近年、国内経済が上向き傾向にあり、これはこれで喜ばしいことと思う。心配なことは、国の人口減少が全体の消費を押さえ、生産年齢世代の減少が所得総額を下げ、高齢者は増加するけども受給する年金は減少傾向になる、そのようにも思います。このような環境のなかで経済が上向き成長していくことはなにか魔法が利いているのかもしれないとも。

一方で、「里山資本主義」「地方創生」という言葉が広く認知されてきていることは何を指しているのか、少し考えてみたい。

すべてが右肩上がりのなかで、経済・景気といった金銭一辺倒の価値観から、真に人として生きていくことの価値観への変化が出てきているのではないか。そのなかで、今や成長産業といわれる、森林・林業はその生きる価値観につながる産業になりうるのではないか、そのようにも考えているところです。

山林の懐のなかで、その山林を生業の糧として、自分で作る安全安心の食糧と清浄な空気と水。他の力に振り回されることなく、地についた自分の足で生きていくことの価値観がこの地域でこそ営むことができる、そう思っています。

森林・林業を基本とした産業構造があれば、次の時代には、持続できうる地域として、人々の目が向いてくると、そう思います。